



TITLE:

## 第12回香川県整形外科集談会抄録

AUTHOR(S):

---

CITATION:

第12回香川県整形外科集談会抄録. 日本外科宝函 1989, 58(2): 265-268

ISSUE DATE:

1989-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/203866>

RIGHT:

## 第12回 香川県整形外科集談会抄録

日 時：昭和63年7月16日（土）  
場 所：大正製薬四国支店  
世話人代表：香川労災病院整形外科 高田敏也

### 1) 鼠径部に発生したガングリオンの1例

香川医科大学 整形外科

○浜崎 寛, 大沢 傑  
天野 正昭, 上野 良三  
オサカ病院  
森川 颯二

ガングリオンは、整形外科領域においては手関節や足関節において比較的好く見られることが多いが、鼠径部周辺にはまれである。

今回、我々は、鼠径部に見られたガングリオンを経験したので報告する。

症例は、74才男性、主訴は左鼠径部腫瘍及び左股関節痛である。

現病歴は、17才頃に一時、左股関節痛出現、その後特に疼痛認めなかったが、5年前頃から左鼠径部の腫瘍に気づいた。

昭和62年1月29日用水路に転落後左股関節痛出現、12月頃から疼痛徐々に増強、同時に左鼠径部の腫瘍も増入してきたため当科受診となった。

初診時、左鼠径部に弾性やや軟の腫瘍を認め、圧痛は著明だが発赤及び熱感認めなかった。腫瘍造影により股関節との交通が証明された。手術により腫瘍を切除、滑液包炎が疑われたが病理組織ではガングリオンとの診断であった。

### 2) Malignant schwannoma の1治療経験

香川労災病院 ○高田 敏也  
水島第1病院 滝沢 正  
旭川荘 鳥越 保之  
香川県身障者総合リハセンター  
高越 秀和

Malignant schwannoma は全軟部悪性腫瘍の5~10%といわれる稀な腫瘍である。腫瘍の広範囲切除、再発例では切断といった手術療法が第1で、放射線療法や化学療法が併用される。我々は31才男性の左下腿に発生した巨大な Malignant schwannoma を経験した。本人家族の希望で切離断が行なわれず、局所再発に対し放射線療法が、そして肺転移に対し化学療法が、一定の効果をあげたのでその治療経過につき報告した。

### 3) Clear cell chondrosarcoma の一例

香川医科大学整形外科

○岡 史朗・吉田 竹志  
大坪 秀樹・大沢 傑  
上野 良三

clear cell chondrosarcoma は、chondrosarcoma の一亜型であるが、非常に稀な腫瘍で、現在まで69例の報告があるのみである。今回、26才、男性の左大腿骨骨頭部に発生した clear cell chondrosarcoma の一例を経験したので報告する。X線像では、一見良性腫瘍の所見を示した。組織学的には、特徴的な clear cell、巨細胞および反応性新生骨を認めた。手術は周囲の筋肉、関節包をつけたまま一塊として切除し、腫瘍用人工股関節置換術を施行した。本腫瘍は予後良好とされているが、骨搔爬のみでは再発率82%と高率に再発するので、より広範囲な切除術が必要である。また今回、術前、術後にアドリアシンとシスプラチンを中心とした化学療法を行った。一般に chondrosarcoma には化学療法が無効であると言われているが、本例において術前化学療法により約20%の壊死率を得た。

### 4) 非外傷性骨化性筋炎の1例

国立善通寺病院 整形外科

○梅原 隆司, 西庄 武彦,  
坂本林太郎, 福島 孝

骨化性筋炎は、一般に骨格外非腫瘍性骨化病変を示し、外傷性または神経因性に生じるものが多い。非外傷性骨化性筋炎はその経過、X線所見、および病理組織所見が傍骨性骨肉腫と類似することもあり正確な診断が必要となる。今回我々は、右大腿近位部に生じた非外傷性骨化性筋炎の1例を経験し、その過程を経時的に観察する機会を得たので報告する。症例19歳女性。主訴、右大腿近位部痛。現病歴、昭和62年7月より誘因なく右大腿近位内側部痛が出現、次第に増強するため、昭和62年8月5日当科初診。疼痛性の跛行と右大腿近位内側部に腫瘤と圧痛を認めた。X線上淡い骨化病変を認め、傍骨性骨肉腫など悪性腫瘍も疑われた。陰影は次第に増強し、入院後の生検にて病理所見上いわゆる pseudomalignant osseous tumor of soft tissue と考えられる骨化性筋炎と診断された。経時的に観察を行ない、生検後10カ月の現在骨化病変は硬化縮小し、日常生活に支障はない。

## 5) Dystrophic calcification の1例

坂出回生病院整形外科

○岡田 祐司, 山田 秀夫  
小川 維二

病例は、71才女性。左大腿外側部の疼痛・腫脹を主訴として来院。初診時、同部の炎症所見および瘻孔からの黄白色石灰沈着物の漏出を認めた。単純X線にて、両大腿ならびに両上腕部の軟部組織に広範な石灰化陰影を呈し、CT ナンバーにより石灰沈着が疑われた。

手術により、腸脛靭帯と外側広筋の部分的な黄白色・骨性硬化とチーズ様の石灰沈着を認め、病理組織像より、広範な線維性瘢痕とその中心に basophilic な石灰沈着を認めた。

注射部位に石灰化を来した。本症例は、筋肉内注射による局所の小外傷が、組織の変性・壊死をもたらし、そのくり返し石灰化を促進したものと考え、Dystrophic calcification の1例として報告した。

## 6) Acromesomelic Dysplasia の姉妹例

香川県身体障害者

総合リハビリテーションセンター

整形外科 ○高越 秀和, 国定 寛之  
中込 直, 藤岡 一平  
小児科 細江昭比古

1971年, Maroteaux らは、短肢型侏儒症で特に前腕、手、足の著明な短縮を伴った症例を acromesomelic dwarfism と命名、分離独立させた。その後1978年の国際命名案では本症は Osteochondrodysplasia に含まれ、acromesomelic dysplasia と改名された。

われわれはこの稀な疾患かつ姉妹例を経験する機会を得、前回第58回中部日本整形外科災害外科学会で報告した。

本症の大半は日常生活に支障はきたさないとされているが、われわれの症例では今回、脊髄症状の発現をみたので現症および本疾患についてあらためて紹介するとともに、その特徴について文献的考察を加えて報告す。

## 7) 胫骨内側顆の圧迫骨折に伴って進行した変形性膝関節症の1例

香川医科大学 整形外科

○大西 啓一, 永野 重郎  
鈴木 裕彦, 上野 良三

骨粗鬆患者の胫骨内側顆の圧迫骨折に伴って急速に進行した変形性膝関節症の1例を経験した。

症例は83才女性で、突然右膝痛を訴えて歩行不能となる。夜間時痛も認め、当科に精査、手術目的にて入院。X線経過を調べると、発症時には、骨シンチ陽性像を認め、単純X線では、胫骨内側顆の porosis のみの所見であった。しかし次第に胫骨内側顆の圧迫骨折が明確となり、内側型の変形性膝関節症が著明となってきた。膝関節の変形破壊が強い為、人工膝関節置換術を施行した。病理所見は、遊離骨片の骨折修復像を示していた。本症は、osteoporosis に伴う胫骨内側顆の insufficiency fracture と思われ、変形性膝関節症の発症原因の1つと考えられる。本症は、神経症性関節症、ステロイド関節症、骨壊死との鑑別が重要である。

## 8) 手舟状骨骨折6手術症例の治療成績

坂出回生病院整形外科

○山田 秀大, 岡田 祐司  
小川 維二

舟状骨骨折の癒合不全6手術症例に対し術後成績及びX線学的結果につき検討を加え報告した。癒合不全例全例 unstable type の骨折であり、その原因は舟状骨の特殊な血管分布形態と骨折後骨折部に働く断断力

が関与するものであろうと考えた。そこで Russe 法に Carpal alignment の 整復操作と掌側の開大支持及びその固定を得る骨移植を行なった。結果としてはほぼ良好な術後成績及び線上の calpal alignment の改善が得られ、Russe 法は極めてすぐれた方法であると考えた。

## 9) 距骨々折・5 例の治療経験

香川労災病院 整形外科

○秋山 明三, 平場 康一  
高田 敏也, 片山 元文  
松本 芳則

距骨々折の発生は比較的稀であり、井口らによると全骨折の 0.2~0.5% であると述べている。しかし、距骨は血行において特異性があるとされ、手舟状骨々折、大腿骨頸部骨折と同じく阻血性骨壊死が生じやすいといわれる。それ以外にも、後遺症として足関節の可動域制限や運動痛、あるいは変形性足関節症を起こす可能性がある。距骨々折の治療においては、これらの後遺症をいかに防止するかが重要である。

今回我々は S57 年から S63 年までに当院において距骨々折を 5 例経験し、術後 1 年以上経過した 3 例は比較的前後がよかったので若干の考察を加えて報告する。

## 10) 当院における Compression Hip Screw の治療経験

高松赤十字病院 整形外科

○笹下 大志, 山下 雅樹  
萩森 宏一, 大久保英明  
千川 隆志

大腿骨転子部骨折に対する compression hip screw (以下 CHS) はその手技の容易さと強固な固定性で安定した治療成績が報告されている。

過去 8 年間に於いて大腿骨転子部骨折 102 例 (Ender nail 61 例, CHS 21 例, その他 20 例) を経験した。

CHS 法 21 例について Evans の分類に従って分類し (安定型 12 例, 不安定型 9 例) 検討を加えた。

解剖学的整復が困難な不安定型はたとえ整復位で内固定が得られても加重によって内反変形や頸部の短縮を起こしてくるために骨折部の安定を得ることは難しい。しかし CHS は、安定型についても不安定型についても、中枢骨片に挿入された lag screw が telescope し骨折部は安定になり、Ender nail はじめ他の内固定

材料より有利であると考えられた。

## 11) 外傷性腋窩神経損傷の 2 症例

香川県立津田病院 整形外科

○松本 敏也, 山下 義則  
前田 徹

比較的まれとされる骨傷等合併損傷を併わない外傷性腋窩神経損傷を 2 例経験したので報告する。

症例 1: 60 歳男性, 船上で左上肢をロープで牽引されつつ下方甲板に転落し左肩後方を強打し、徐々に左上肢挙上困難となり当科受診。手術所見より Quadrilateral space での腋窩神経の直接の損傷に加えて、血腫由来の瘢痕組織による絞扼性神経障害と思われた。

症例 2: 45 歳女性, 交通事故で左肩後方を強打し、徐々に左上肢挙上困難となり当科受診。保存的に加療したが、症例 1 とほぼ同様の病態と考えられた。

経過: 症例 1 は術後約 6 カ月で 120° 外転可能に、症例 2 は受傷後約 6 カ月でほぼ正常な可動域にまで改善したが、文献上の腋窩神経麻痺の回復経過に比べて、両者共に比較的早期に良好な機能改善が得られた。

## 12) 腋窩神経麻痺と腱板断裂を合併した肩関節前方脱臼の 2 症例

高松平和病院 整形外科

○真鍋 等, 岡内 章  
香川医科大学 整形外科  
多田 浩一

腋窩神経麻痺と腱板と断裂を合併した肩関節前方脱臼の 2 例を経験し、観血的検索を行ったので文献的考察を加えて報告する。症例 [1] は 66 歳男性で徒手整復後 3 週で腋窩神経麻痺に気づき、4 週で関節造影を施行し腱板断裂と診断。受傷後 3 ヶ月で神経剝離術を施行した。筋力は順調に回復し、現在腱板断裂に対し手術を予定している。症例 [2] は 58 歳女性で徒手整復の翌日腋窩神経麻痺と橈骨神経不全麻痺に気づき、関節造影にて腱板断裂と診断した。受傷後 2 ヶ月で腋窩神経を検索したが著明な変化は認めず、その後順調に筋力が回復し肩関節痛も消失した。肩関節脱臼による腋窩神経麻痺の発生機転と治療につき考察した。

## 13) 血管造影後に発生した正中神経麻痺の 2 症例

香川医大整形外科

○鈴木 裕彦, 多田 浩一  
吉田 竹志, 柴田 徹  
島田 幸造

血管造影の合併症として血腫の形成はよく知られているが、血腫による正中神経麻痺の報告は少ない。今回我々は血管造影施行後の血腫により生じた正中神経麻痺の2例を経験したので報告する。

症例1: 71歳の女性。血管造影施行後、突然4日目に再出血。左正中神経麻痺を呈した。臨床症状、EMG, CT, RI-Angiography にて血腫の圧迫による正中神経麻痺と診断し、血腫除去術、神経剝離術を施行した。術後18ヶ月の現在、運動は M<sub>4</sub> 知覚は S<sub>2+</sub> に回復した。

症例2: 77歳の男性。両下肢 ASO にて人工血管置換術を受けている。術後、血栓予防のためワーファリンの投与を受けていた。造影検査後1日目に左正中神経麻痺を呈した。臨床症状、EMG, CT にて血腫の圧迫による正中神経麻痺と診断し症例1と同様の手術を施行した。

血腫の原因はともに出血凝固機能異常であった。また、診断にはCTが有用であった。治療としては早期の神経除圧が必要と思われた。

#### 14) Osteoporosis に伴う脊椎圧迫骨折による対麻痺

香川医科大学 整形外科

○村瀬 剛, 大和田哲雄  
岡 史朗, 白崎 信己  
岡田 孝三

国立療養所高松病院 整形外科  
林 春樹

Osteoporosis に伴う脊椎圧迫骨折による脊髄麻痺の3症例を経験した。

症例1は、78才男性。特に誘因なく歩行時右下肢脱力出現。その後2ヶ月で歩行不能に至った。画像診断上は、L3 椎体後壁の脊柱管内陥入と、軟部組織による、硬膜外の圧迫像を認めた。L3 椎体亜全摘、前方固定骨移植術施行、術中所見では、椎体終板を伴った椎間板ヘルニアであった。

症例2は、68才男性。転倒後1ヶ月で、ほぼ完全麻痺となった。画像診断上、Th12 椎体の扁平化と、骨片の脊柱管内陥入による脊髄圧迫を認めた。後方侵入前方除圧と C-D 法による後方固定術施行した。

症例3: 77才女性。転倒後2ヶ月で両下肢不全麻痺に至る。画像診断上、椎体後壁による中央前面からの脊髄圧迫を認め、外傷性の粉碎骨折に似た圧迫形態を示した。Harrington rod による後方固定後、Th11, 12 前方除圧、固定術を施行した。

#### 15) 頸椎化膿性脊椎炎の治療経験

三豊総合病院 整形外科

○橋 敬三, 遠藤 哲  
十河 敏晴, 高橋 昌美

西山整形外科

西山 敬兼

従来化膿性脊椎炎は、比較的まれな疾患と考えられている。カリエスの減少にともない脊椎の炎症疾患として重要な位置を占めるようになってきた。今回我々は化膿性脊椎炎のなかでも比較的まれとされている頸椎化膿性脊椎炎2例を経験したので文献的考察を加え報告する。